

穴窯

これは、7世紀頃から美濃で使われていた「穴窯」の図である。穴窯はその名の通り、丘の斜面に穴を掘って作る。この穴が窯の一つの焼成室となる。炉の下端には炉口と火室があり、上端にはダンパーと煙道があります。

火室が低い位置にあることで、熱が自然に炉内に伝わり、陶器を焼くことができる。ダンパーを使って煙道を開け閉めすることで、熱の出入りを加減して温度を調節することができる。

焼成室の前にある柱は、窯の屋根を支えるものではない。これらの耐火性の石柱は「分煙柱」と呼ばれる。これらの柱は、空気の流れをコントロールして窯の中の温度を均一にすることで、作品を均一に焼くために窯に加えられた。分煙柱は、美濃をはじめとする日本の中央地域で作られた窯の特徴である。